信毎俳壇

神野 紗希 選

地震のあと罅走る野の黄水仙　（須坂市）東鳥 雄二

コーヒーの冷めて氷柱の雫かな　（長野市）大島 昇

小児病棟点滴瓶で作る雛　（須坂市）東鳥賀代子

くすくすとストーブ囲む膝頭　（松本市）伊藤 和夫

初午や赤き闇なる鳥居径　（上田市）竹内 重美

消灯にいそぎんちゃくの萎みけり　（小諸市）加藤 陽介

追ひつかぬやうに児を追う春野かな　（箕輪町）向山 政俊

早春のトースト光る蜜の渦　（塩尻市）百瀬 はな

ゆきうさぎしーるこうかんなんてしない　（中野市）風間 一乃

をさな児の文字書く音に雪積もる　（千曲市）たじまたける

佳作

猫の子の猫の子を追ふ速さかな　（松本市）小松 久志

雪かきやなあんしてこうもふるなだや　（長野市）太田 実

選評

一句目、土中に眠る球根は、罅が入って大地が傷ついても、たくましく花を咲かせる。黄水仙に春の再生の光がまぶしく宿る。二句目、湯気を立てていたコーヒーもいつしか冷め、氷柱の雫はきらりきらりと時を刻む。熱の移ろいを意識することで、雪国の日常のひとこまが感覚的に描かれた。三句目、治療中の子どもたちが少しでも季節を感じられるように。手作りのお雛さまにこめた祈りの尊さ。

坊城 俊樹 選

片恋の終りぬバレンタインの日　（埼玉県上尾市）小村 勝子

保険屋と死の話する冬ぬくし　（飯綱町）坂井 寿男

雪の駅待つ人はみな無表情　（宮田村）金本 牧子

風光る2B鉛筆尖らせて　（長野市）宮島佐代子

立春や双子の兄と喜寿の膳　（長野市）長田 光弘

はらからを亡くして妻よ冬深し　（大町市）原田 勝

切干しは母の匂ひと日の匂ひ　（上田市）林 園江

春寒し香り袋の紐緩む　（長野市）菅野 早苗

三寒に生きし物待つ四温かな　（長野市）鶴田のり子

頬赤き村の子はみなスキーヤー　（小海町）依田 久代

佳作

新任の県境校や春浅し　（佐久市）赤岡 厚子

凍て返る道に転がる軍手かな　（佐久市）臼田 文子

選評

一句目、片恋とは片思いのこと。バレンタインの日に終わった恋。何か決定的なことを言われたのだろうか。大人になっても忘れ難い思い出。二句目、生命保険の勧誘員と話した死について。さまざまな死のありさまはどこか人生の素敵な話でもある。逆説的な面白さ。三句目、この光景は眼前に広がる。なかなか来ない雪の駅は皆押し黙っている。ただ白い息をして。これまた人生模様ではないか。

今井 聖 選

編みかけの毛糸何ものにもなれず　（佐久市）高橋衣里子

内裏雛ささめきあふは京言葉　（上田市）田名網 剛

体幹の極みまさまざ冬五輪　（諏訪市）小林さよ子

風花やAマイナーのアルペジオ　（松本市）伊藤 和夫

下宿して埋火をして遠き日よ　（飯綱町）坂井 寿男

枯れ草に急ブレーキの匂ひ哉　（塩尻市）神戸 千寛

切炬燵北ア連山差し向かひ　（長野市）中沢 義寿

身の春や南の眼科北の歯科　（佐久市）西田 和彦

味噌蔵の裸電球春寒し　（長野市）荻原 宏祐

襟巻をはずし葬送の門に立つ　（飯綱町）小林 紀子

佳作

独り居に降り来て何ぞ寒雀　（佐久穂町）石田 弘子

鱗粉に宿る氷河や冬の蝶　（飯田市）吉沢 奨

選評

一句目、編みかけの毛糸は何にでもなれるし何ものにもなれない。形が決まる前はどんな可能性も秘めているという蔵言のようだ。二句目、そうか、平安時代を発祥とするお雛さまはあのおちょぼ口から京言葉を発していたのかと改めて思う。三句目、スポーツの祭典を見ていて「体幹」を思う。今からでも鍛えねばと。四句目、このコードは哀切なメロディー。風花にぴったりだ。